

興福寺西金堂さいこんどうは、天平六年（七三四）一月一日、光明皇后こうみょうこうごうが母である橘三千代たちばなのみちよのために建立した（『水鏡』に記される）。本尊は釈迦如来で、脇士（本尊の両脇に控える仏像）の二菩薩（薬王菩薩やくわうぼさつ・薬上菩薩やくじょうぼさつ）や、羅漢（十大弟子）、神王（八部衆）などの像を安置した（『元亨釈書』に記される）。

この本尊の像については、インドのガンダーラ国王の後が、どうにかして現世にあらわれた観音菩薩の化身を拝みたいと誓願したところ、枕もとにある人が姿をあらわし、「日本の国王の後である光明子こそ、現世にあらわれた観音菩薩の化身である」と告げた。そこで夢から覚めた。このことを臣下に伝えたところ、臣下たちが評議して、光明子がこちらにやって来ることはない。また（ガンダーラ国王の）后が日本へ行くこともない。もっぱらその姿を模造するしかないと決断し、優れた工人を日本へ派遣した。工人が日本に到着し、事情を説明した。光明皇后は、「我が母のために仏像を造りたい。ちようどよい機会なので、あなたがそれを彫刻して献上しなさい」と述べた。そこで工人は釈迦の像を造り、それに眉間の玉を入れようとすると、仏像がひとりでに光を放ったので、信仰が胸に満ち、感涙が袖から溢れて、もはやその理由がないとして玉を入れなかった。西金堂の本尊がすなわちこれである。さて、工人は光明皇后の姿を模造して、中国の方へ帰って行ったとのことである（『御巡礼記』に記される）。

また、ひとりでに出現した観音像（『平家物語』に記される）がこの堂にある。そもそもこの像は、昔伝法院の修円僧都しゆえんそうず（僧都は僧の官職）という僧がいて、寿広じゆこう已講いこう（已講は僧の学階）という僧を伴って尾張国から都へ向かった時、加茂坂（奈良坂）という場所の姿すがた（菅田）池のほとりで、「已講、已講」と呼ぶ声があった。誰かと振り返って見たけれども、人の姿はなかった。もう一度この地へ赴いたところ、再び呼び声が聞こえたので、とても不思議に感じて声について行くと、たんぼの中に十一面観音像があった。夢か現実かも分からないままこれを抱き上げ、背負って奈良へ帰った。この仏像をひとまず興福寺の南大門に置き、いずれの堂に安置すればよいか僧侶たちが評議して、金堂からはじめて、堂の扉を開いて入れようと

するものの、その時千万人の力でも叶わない程に仏像が重くなってしまふ。堂ごとに伺いを立てるが、仏像は一向に軽くならない。ところが、唯一西金堂の前では非常に軽くなった。よって西金堂に安置されたとのことである（『源平盛衰記』に記される）。